

東北地域の食育取組事例について (現地調査事例)

東北農政局 消費・安全部

頁	県別	活動団体等の所在地	活動団体等名	活動の名称等
1	青森	三戸郡三戸町	三戸食農推進協議会(事務局:三戸町教育委員会)	「さんのへ農業小学校」開校による食育活動の推進
2		弘前市	弘前市立東目屋中学校	リンゴ作りでひとづくり
3		十和田市	十和田市立南小学校	めざせお米大使
4		弘前市	紅屋商事株式会社	食育コミュニケーション活動による豊かな食生活の提案と地域社会への貢献活動
5	岩手	一関市	一関もち食推進会議	一関もち食文化の理解増進と継承
6		遠野市	遠野市総合食育センター	総合食育センターを核とした食育推進
7		紫波郡紫波町	紫波町日詰公民館/日詰地区先人顕彰会	「わんぱくまつり」等の食育活動
8		紫波郡紫波町	(株)紫波フルーツパーク	収穫体験・加工体験を通じた食育活動
9		紫波郡紫波町	岩手中央農業協同組合	「ちゃぐりんスクール」農作業体験ツアー
10		奥州市	おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会	修学旅行生を対象としたグリーン・ツーリズム
11		紫波郡矢巾町	やはば食ネット/矢巾町農業対策会議	矢巾町の取組「やはばっこ食育体験ツアー」等
12		久慈市	社会福祉法人小袖保育園	ぼくらは海の子 小袖の子 地域みんな あったか家族
13	宮城	仙台市	株式会社仙台水産	テレビ、料理教室を活用した魚食の普及促進
14		仙台市	食育NPO「おむすび」	つくる人と食べる人をつなぐ
15		仙台市	コミュニティみやぎ野菜ソムリエの会	野菜を使った食育や食生活改善活動
16		角田市	角田市農業振興公社	あぶくま農学校「食農学習の里づくり」(農業体験事業)
17		大崎市	大崎市立中山小学校	地域と連携した食育活動

頁	県別	活動団体等の所在地	活動団体等名	活動の名称等
18	宮城	大崎市	大崎市立鳴子小学校	地域と連携し地場産品を活かした食育
19		加美郡加美町	農事組合法人KAMIX	子どもを対象とした農業体験の提供
20		仙台市	みやぎ生活協同組合	みやぎ生活協同組合の食育活動
21	秋田	にかほ市	農村レストラン 食育工房「農土香」	食べ物、農業、健康な身体、そして自然 みんなつながっています
22		秋田市	秋田県耕作放棄地対策協議会	耕作放棄地を活用した農業体験施設「あきた体験農園」
23		能代市	鶴形そば製造加工株式会社	地元食材を通じた食育推進と農業体験
24		潟上市	農業体験型民宿「ファーム・イン果夢園」	農業体験型民宿における農作業体験
25		大仙市	仙北平野あぐり耕房推進協議会／農家民宿 季節の郷	都市・農村交流の架け橋
26		仙北郡美郷町	農事組合法人TEAM. Freedom	ようこそGreenWonderlandへ ～園児によるソラ豆の収穫体験～
27		仙北市	農家民宿 星雪館	農業体験型民宿における農作業体験
28	山形	東置賜郡川西町	山形県立置賜農業高校	食と農を通じた地域の活性化
29		長井市	農家れすとらん「なごみ庵」	農業体験のできる農家レストラン
30		酒田市	中平田地区農業振興協議会	小学校5年生による農業体験
31	福島	喜多方市	喜多方市教育委員会	喜多方市小学校農業科
32		会津若松市	会津若松市農政部農政課(事務局)	会津若松市グリーンツーリズム・クラブ
33		白河市	白河農業協同組合	あぐりスクール
34		白河市	東西しらかわ農業協同組合	バケツ稲学習及び田植え・稲刈り体験
35		喜多方市	NPO法人 喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンター	喜多方ふれあい農業田舎体験
36		須賀川市	須賀川商工会議所(事務局)	須賀川料飲リサイクル倶楽部

※当取組事例は、次の東北農政局ホームページ(食育推進)でも、紹介しております。

東北農政局 食育推進

検索

<http://www.maff.go.jp/tohoku/syouan/syokuiku/index.html>



「さんのへ農業小学校」開校による食育活動の推進

青森県三戸郡三戸町

三戸食農推進協議会(事務局:三戸町教育委員会)

調査年月日:平成25年6月11日

1 概要

① <<概要・データ>>

- ・食農教育の一環として子どもたちが年間を通じて農業・自然活動を体験できる「さんのへ農業小学校」を平成23年度にモデル的に開校。(県内初の取組)
- ・運営主体は、地元農家や町内会の方で組織する「三戸食農推進協議会(平成22年設立)」事務局は、三戸町教育委員会が担っている。
- ・廃校となった小学校校舎を活用し、町内の水田、畑、りんご園場を拠点として体験活動を実施している。

② <<特徴的な取組>>

- ・平成25年度で三期目。参加児童は、三戸町児童のほかに近隣の八戸市、南部町、田子町からも参加している。平成25年度参加児童数27名。
- ・平成25年度の年間授業計画は、全15回の体験メニューを用意しており、栽培・収穫、販売体験までを実施。(大豆やジャガイモの植え付け、牧場体験等)
- ・さんのへ農業小学校は、実際に農業を営んでいる方々が“農家先生(認定農業者等)”と称して指導を行い、町内会の役員も地元調整役の“地元先生”として支援をしている。
- ・平成25年度からは、地域の人々との交流や、地域コミュニティの形成ということを目的に三戸高等学校生徒が児童の作業補助にあたることとしている。



小学校の入学案内



2 今後の課題、目標等

- ・収穫物を11月に開催されている三戸町農林水産祭のみで販売をしているが、今後は、町の産直広場でも収穫物の販売をすることも検討している。
- ・農業小学校の園場管理作業について、今後は障害のある方にも協力をしていただき“町全体のさんのへ農業小学校の運営、活動”としたい。

1

リンゴ作りでひとつづくり

青森県弘前市

弘前市立東目屋中学校

調査年月日:平成25年7月30日

1 概要

① <<概要・データ>>

<昭和22年学校農園40aでリンゴ栽培開始>

- ・学校農園は、昭和22年東目屋村立東目屋中学校発足時、「食料不足」の時代に地域の生徒に「少しでも食べ物を」という事情から40アールの園地(地域から借用)にリンゴ栽培を始めた。今年で66年目を迎え、全校生徒(47名)が中心となり、20アールの園地に50本のリンゴの木(学校所有)を栽培しており、PTA営農指導部やJAなど地域の組織からも協力を得ている。

<総合的学習で「自ら学び、自ら考える=生きる力の育成」を目標>

- ・総合的学習の時間は、「自ら学び、自ら考える=生きる力の育成」を重点目標とし、農園活動(4月~3月まで)42時間、リンゴ新聞制作6時間、美術科+α、各教科(英語・国語・家庭科・道徳講話ほか)など、合計70時間の総合的な学習となっている。

② <<特徴的な取組>>

<修学旅行先でリンゴを無料配布、青森リンゴをPR>

- ・生徒は、雪解け時の融雪作業に始まり、人工授粉、摘果、袋かけ、葉とり、収穫、県産リンゴのPR活動など年間をとおして自ら活動している。
- ・修学旅行の際、旅行先で自分たちが育てたリンゴを無料で配布し青森リンゴをPRしている。また、外国の方にも英語でPRするなど、コミュニケーション能力の向上を目指している。
- ・平成24年度は、応援の絵入りリンゴを、東日本大震災被災地である岩手県野田村小中学校に送った。
- ・個人新聞の発行、農園記録の作成などの効果測定がしっかり行われている。



- (受賞歴等)
- ・平成23年度「青森県リンゴ品評会」【団体の部】銅賞受賞
 - ・平成19年度朝日新聞社主催「朝日のびのび教育賞」受賞

2 今後の課題、目標等

- ・少子化のなか、生徒数の減少によりリンゴ栽培の負担が大きくなること。
- ・リンゴ栽培技術が、上級生から下級生に受け継がれるように生徒会の農園委員会を機能させ伝承されるように努力していきたい。

2

めざせお米大使

青森県十和田市 十和田市立南小学校

調査年月日:平成25年8月5日

1 概要

① <概要・データ>

- ・地域の基幹産業である農業について、農家の工夫や努力を知ることにより、農業や地域に愛着を持ってもらうことを目的に、農業体験を平成23年度から実施。
- ・総合的な学習の時間のほか、社会科、図工、国語、家庭科の時間も使いながら、全体で43時間を確保。5年生3クラスの130名が参加。



農家先生より説明を受ける生徒たち

② <特徴的な取組>

- ・取組内容は、田植え、稲刈り、脱穀（一部手回しの唐箕を使用）、おむすび作り、稲わらを利用したしめ飾り作り、詩と粘土作品（田んぼの守り神）作り。
- ・水田は、学校から徒歩で30分ほどのところにあり、元職員（現在は農業）から直接農作業の方法や水田の管理まで、全面的な指導と協力を得ている。
- ・脱穀の農具（唐箕）を、昔の農具を所有している十和田市立新渡戸記念館から借用し、使い方の指導を受けている。
- ・春休み期間に、詩と粘土作品を十和田市現代美術館に展示し、来館者から好評を得ている。

2 今後の課題、目標等

- ・近くに水田を借りたいが、学校周辺が住宅地のため、難しい状況にある。
- ・活動が長期間にわたるため、メニュー作りや時間数の確保に労力を要している。
- ・平成26年度の修学旅行（小学6年生、函館市）では、市役所・JAの協力を得て、十和田市産の農産物を持参し、PRすることを計画している。



3

食育コミュニケーション活動による豊かな食生活の提案と地域社会への貢献活動

青森県弘前市 紅屋商事株式会社

調査年月日:平成25年10月9日

1 概要

① <概要・データ>

<地産地消を中心とした取組>

- ・店舗において、「食育週間」を設け、その土曜日に「食育試食会」を実施。一汁一菜の献立をもとに健康的な食生活の普及に努める。また、テーマにそって地産地消コーナーを設置したり食育に関する広報活動を行っている。その他、収穫体験や加工場見学などを実施。



従業員による店頭啓発活動

② <特徴的な取組>

- ・日本食育コミュニケーション協会に入会し、平成23年から毎月19日を含む1週間で「食育週間」に設定。60名の食育コミュニケーター（協会の資格）が中心となり「食育コミュニケーション活動」を実施。
- ・従業員への啓発も行っており、食育週間はパート従業員が主体となり店頭で啓発活動を実施。従業員対象の商品知識向上のための各種セミナーなども実施。
- ・店舗で減塩など体に良い献立等を紹介。食育週間の土曜日に大試食会を行ったり、地産地消活動として、店内に産直コーナーを設け、地場産品の売り上げを伸ばしている。また、近隣農家で収穫体験等を実施。
- ・社内報を使用した広報活動、店舗独自の知育教室、食育通信の配布、食育クイズラリー、メーカーとタイアップした体験コーナーなど楽しく学べる機会を提供。
- ・「いただきます」の意義や、箸の使い方を学ぶ「豆つかみコンテスト」、POPなどで食文化の伝承にも取り組んでいる。
- ・行政機関などとも連携し、小学校の社会科見学では店舗内の青果、鮮魚、精肉など各部門のバックヤードの見学等を実施。

(受賞歴等)
 ・平成25年度
 第1回「食と農林漁業の食育優良活動表彰」
 【企業部門】
 消費・安全局長賞受賞

・平成25年度
 「フード・アクション・ニッポン アワード2013」
 【流通部門】
 優秀賞受賞

2 今後の課題、目標等

- ・スーパーマーケットとして、地域住民へのより良い食生活の普及、地域の活性化に寄与したい。
- ・行政や教育機関と連携を固め、地産地消や食料自給率の向上に貢献したい。
- ・従業員に対し、働きがいをもたせ、地域貢献の意識を高めたい。
- ・積極的に健康に配慮した献立の提供などを行いたい。



4

一関もち食文化の理解増進と継承

岩手県一関市 一関もち食推進会議

調査年月日：平成25年6月4日

1 概要

① <概要・データ>

- ・取組団体 一関もち食推進会議（会長 佐藤咲信氏（世嫡の一（特ノ伊）酒造（株）会長））
- ・かつて岩手県内では、一部地域から生産された米の大部分が地域外へ出荷されていたことや、米の消費量が減少していたことから、米の消費拡大のためにもち食の普及活動が実施されていた。
- ・もともと一関地方には、「もち本膳」という格式のあるもち食の伝統があったので、市民による様々な団体が独自にもち食の普及促進に向けた活動を行っていた。しかし、それぞれの活動に連携がなかったため、個別の取組を結集すべく一関もち食推進会議が設立され、もち食文化の理解増進や継承と併せて、米の消費拡大にもつなげる商品開発、イベント開催、学校給食へのもちの提供などに取り組んでいる。

② <特徴的な取組>

- ・日本食文化の無形文化遺産登録に向けた取組の一つとして活動。
- ・食による地域活性化を図る「ご当地もちサミット」を平成24年から三か年開催予定。
- ・一関・平泉地域の飲食店と連携し、もち街道MAPを作成し、もち食メニューを提供。
- ・小中学生や栄養教諭等への「もち本膳」研修会の実施と、給食へのもち食提供を推進。
- ・「一関もち食文化」の普及・伝承のための「もち本膳」講習は、のべ100回達成。
- ・一関市役所がもち食推進会議の活動に積極的に協力。

2 今後の課題、目標等

- ・年間もち百万食を目標にもち米の生産増、消費拡大に取り組む。
- ・もちを身近なものとするためのスイーツなどの商品開発、もちを通じた新たな農工商連携を模索する。
- ・もちイベント開催を通じて、一関地域のブランド化を図る。
- ・伝統食であるもち料理を、次代を担う子どもたちへ継承していく。
- ・地元企業と連携して振興していく必要。



ご当地もちサミット



お膳に並んだ様々なもち

(受賞歴等)
・平成25年度
「フード・アクション・ニッポン アワード2013」
食文化賞受賞



5

総合食育センターを核とした食育推進

岩手県遠野市 遠野市総合食育センター

調査年月日：平成25年6月4日

1 概要

① <概要・データ>

- ・既存の給食センターの老朽化と児童生徒数の減少が進む中で、新設する給食センターをより有効に活用するため、複合的機能を持つ「総合食育センター」として平成25年4月に開所。併せて同センター内に遠野市総合食育推進課も新設。
- ・同センターは、学校給食提供の他、「食育の推進」、「地産地消の推進」、「高齢者への配食サービス」、「災害時の炊き出し」の機能も有する、オール電化施設。

② <特徴的な取組>

- ・同市は食育推進計画に基づき全世代に対応した食育を推進してきたが、同センター、総合食育推進課が新設されたことにより、今まで教育、福祉、農林など各分野で別個に行っていた食育推進の取組が、今後センターを拠点として一元的に連携して推進。
- ・同センターの食育推進の連携・協力団体は幅広く、遠野市産直給食会、遠野地方Y・Y・Y推進女性の会、遠野市食生活改善推進員団体連絡協議会、遠野郷生活研究グループ、農協女性部等。
- ・学校給食に使用する食材は、遠野市産にこだわり、遠野市5産直施設で構成する遠野市産直給食会から食材を調達している。地場産使用率は、平成24年度実績（重量ベース）で69.5%。

2 今後の課題、目標等

- ・調理実習室兼会議室を市民の集う場として開放したいが、給食施設という衛生面の制約や市中心部から離れている立地条件から、いかに食育推進の拠点として広く活用していけるかが課題。



調理場の様子



2階の展示コーナー



6

「わんぱくまつり」等の食育活動

岩手県紫波郡紫波町

紫波町日詰公民館／日詰地区先人顕彰会

調査年月日：平成25年6月14日

1 概要

①<<概要・データ>>

- ・日詰公民館、日詰地区先人顕彰会、紫波町の三者が一体となって日詰小学校3年生の総合的学習の授業として、卵料理を取り入れた食事作りを体験し、食の大切さや材料の調達などを学ぶ「わんぱくまつり」を行っている。
- ・男性を対象にした「男の料理教室」や出前パン作り講座、作ったお弁当でお年寄りとの食事会なども行っている。

②<<特徴的な取組み>>

- ・「わんぱくまつり」は、産卵率の高い鶏「ゼンダックス」を育成し、紫波町の名誉町民となった橋本善太氏を顕彰する事業であることから、必ず卵料理を取り入れている。
- ・「わんぱくまつり」は、食事作りの一連の流れの中で、**食事への関心を高め、親子の会話を大切にし、自立心を育てること、また好き嫌いを減らすこと、五感を豊かにすること、食に関わる人々への感謝の念を育てることを目的としている。**
- ・女性サークルが作ったお弁当で高齢者と言う食事は地域の高齢者対策にもなっている。



日詰公民館の皆様



日詰小学校

(受賞歴等)
・平成24年度
「岩手県食育推進貢献者表彰」受賞

2 今後の課題、目標等

- ・火を使えない子、包丁を使えない子、また卵を割れない子もいるので、そのような子どもにどう教えていくか。
- ・子どもが家でも調理をしたがっても親にさせてもらえないことがあるので、親の意識改革をどうするか。
- ・今後も継続し、自分で作ったものは「おいしい」という子どもたちの気持ちを大事に育てたい。



7

収穫体験・加工体験を通じた食育活動

岩手県紫波郡紫波町

株式会社 紫波フルーツパーク

調査年月日：平成25年6月14日

1 概要

①<<概要・データ>>

- ・園内にはリンゴ、ブドウ、ブルーベリー、さくらんぼなどの木、約1,000本が植栽されているほか、延べ120坪(60坪×2棟)のガラス温室なども整備。
- ・自然とのふれあいの場として森林散策も楽しめ、果物の摘取り体験ができる「体験農園」と、町内の原料を使った加工体験ができる「体験工房」があり、農業体験を通じた食育を行っている。社長は紫波町長。企画・運営は取締役専務が行っている。

②<<特徴的な取組み>>

- ・摘取体験とともに、地元の野菜を使ったピザ作り、そば打ち、ソーセージ作りなどの体験で食育活動。
- ・中学生などが自ら収穫したぶどうでワインの仕込を無料体験する。
- ・ワイナリーでは近隣のぶどう生産農家16軒とも提携し、自園自醸。紫波町の農産物の販売促進にも繋がっている。
- ・東日本大震災後は沿岸部からの来園者も多く、被災者の支援活動にも繋がっている。



体験工房等が入った施設



体験農園

2 今後の課題、目標等

- ・事業拡大のため敷地や農地を増やして原料を確保したり、灌水設備を整えたいが資金繰りが難しい。
- ・農家の後継者を育て、地域の農業振興に繋がりたい。
- ・子どもだけでなく、そば打ち体験などを通じて高齢者対策などを行いたい。
- ・6次産業化の認定事業者となり、交付金を使っているが、食育関係も含め国の補助金や交付金をもっと使いやすくしてほしい。
- ・農業後継者の高齢化対策など地域農業の振興を図ってほしい。



8

「ちゃぐりんスクール」農作業体験ツアー

岩手県紫波郡紫波町 岩手中央農業協同組合 後援:盛岡市・矢巾町・紫波町教育委員会 調査年月日:平成25年8月1日

1 概要

① 《概要・データ》

- 平成19年から、若い世代に、食の大切さを知り食と農への関心を深めてもらうため、J Aいわて中央管内の小学校1～3年生の親子を対象に、年3回の農作業体験ツアー「ちゃぐりんスクール」を実施。
- 当初は参加者が集まらなかったが、教育委員会や学校に働きかけたところ、協力を得られるようになり、現在は定員を超過するほどになり申し込みを断らざるを得ない場合もある。平成24年度の参加児童は57名。
- 4年生になってもまた参加したいとの希望があるなど、毎年楽しみにして参加する小学生が多い。

② 《特徴的な取組》

- 平成25年度は、アスパラガスの収穫と田植え体験(参加親子34名+J A新規採用者14名)、トマトの収穫と石窯ピザ作り体験(参加親子31名)を実施した。秋には、しいたけの収穫と稲刈り体験を予定。参加費は、昼食代としてひとり500円。
- 田植え・稲刈り作業の指導はJ A青年部が担当し、昼食はJ A女性部の手作り弁当を提供している。
- 稲刈り体験時には「せんばこき」や「足ふみ脱穀機」を使い、昔の農作業にも理解を深めている。
- 「ちゃぐりんスクール」の経費は、岩手県信連の助成金でまかなっている。

2 今後の課題、目標等

- 内容のマンネリ化を懸念している。収穫作物を変更するにも協力してもらえる農家がなかなかいない。選果場見学等で出荷までの一連の流れを見てもらいたいが、日程調整が難しい。
- 1回の人数は増やせないが、対象とする小学校を増やしていければと考えている。



活動記録集



修学旅行生を対象としたグリーン・ツーリズム

岩手県奥州市 おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会(奥州市農林部農政課内) 調査年月日:平成25年9月11日

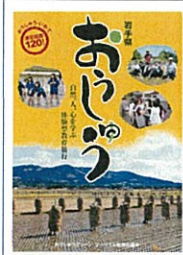
1 概要

① 《概要・データ》

おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会は、平成18年3月に市町村合併を機に設立。奥州市(旧市町村の水沢・江刺・胆沢・前沢・衣川の5地区)と平泉町の合わせて6地区の協議会により構成され、岩手県の「農林漁業への民泊に係る取扱指針」並びに「岩手県体験型教育旅行推進計画」に基づき、農業体験や農家の生活体験活動等を行っている。平成24年度の登録農家数は215戸で、受入実績は14校1,792人(平成25年度事業計画では18校2,741人)となっている。

② 《特徴的な取組》

- 奥州市内5地区と平泉町の計6地区で都市部の小・中・高校生を対象に、農家民泊による体験型教育旅行(修学旅行・自然教室等)を受け、生徒数が多い学校にも対応。受入期間は5月～10月で、最大受入数は400名。
- 1農家あたり4～5人を受け、小・中・高校生と農家が対面する会場から農家までの移動、農作業体験、生活体験、終了式会場への移動まで、全て1つの農家が担当。
- 生徒をお客様としてもてなすのではなく、家族の一員として迎え、農作業はもちろん、食事の準備、後片付け、就寝準備などを生徒と受入農家が一緒に行う。
- 収穫物を使った食文化指導体験活動も実施。受入地区によって異なるが、そば、うどん、はっとん、餅、豆腐などの郷土料理づくりを体験。
- 都市と農村との交流事業として、受入校交流事業(受入校の学校行事を活用して交流)、農産物交流(受入校交流事業を活用して農産物交流事業展開)、おもいで米の発送(体験学習生が作業に携わった米を「おもいで米」として、受入校に新米を発送)を実施。



協議会のパンフレット

(受賞歴等)
・平成25年度
「第11回オーライ!ニッポン大賞グランプリ」
内閣総理大臣賞受賞



2 今後の課題、目標等

- 農家や担い手の減少に伴い、受入登録農家をどう確保・拡大させるか、また、事務局体制(人の確保)をどう維持していくかが今後の課題。
- 受入のノウハウを高めるため、研修や情報交換会を開催し、より良い意見を出し合い学ぶことで活動を活性化させていきたい。
- 東日本大震災以前は、受入学校数・生徒数とも増加傾向にあったが、震災以降は原発事故に伴う放射能汚染とその対策を懸念する保護者が多いこともあり、受入学校数・生徒数は減少に転じた。特に近年では関東や関西方面の修学旅行の受入が少なく、近隣の宮城県内の学校(1泊2日の野外活動など)が主流となっている。対策としては、定期的な放射線測定を行い、安全に十分配慮した当協議会の受入体制を理解していただくため、受入校には直接説明を行い、受入の拡大に繋げていきたい。

矢巾町の取組「やはばっこ食育体験ツアー」等

岩手県紫波郡矢巾町 やはば食ネット／矢巾町農業対策会議

調査年月日：平成25年9月26日

1 概要

① 《概要・データ》

- 【やはば食ネット】（事務局：町生きがい推進課）
 - ・矢巾町内の保育園・小中学校、矢巾町学校給食協同調理場の栄養士で平成15年発足。成人を対象として食生活改善事業を実施していたが、偏食、個食、朝食抜きの児童や肥満児童についての指摘があることから、若齢世代を対象とした事業を行うこととした。
- 【矢巾町農業対策会議】（事務局：町農林課）
 - ・生活部会の食育に関する事業として、食育ツアー、メニュー考案と調理コンクールを実施。
 - ※生きがい推進課と農林課は、やはば食ネット、矢巾町農業対策会議それぞれの構成員になっており、事業内容の重複等を調整しながら活動を行っている。



出来たての豆腐

② 《特徴的な取組》

- ・生産部門の体験と加工部門の体験をそれぞれ年に1回実施。開始当初は里芋堀りを行っていたが、じゃがいも堀りに変更。平成22～24年度は冬休み親子食育体験として、地元の農業農村指導士が講師になって大豆収穫と豆腐作りを行っている。
- ・食育ツアーでは、平成24、25年度のベリー摘み取りとジャム加工体験を実施。
- ・小学生及び中学生がメニューを考案して、実際に調理した料理のコンクール（平成18～23年度）を、毎年、テーマを決めて実施。テーマは、平成18年度「地元産の米またはナンブコムギを使用したメニュー」、平成19年度「ごはんが進むお弁当のおかず」、平成20年度「ねぎがメインの一品料理」、平成21年度「さんさそばを利用した料理」、平成22年度「矢巾町の野菜を使用したお弁当」、平成23年度「こんな場所で食べたいお弁当」。
- ・豆腐作成途中の豆乳を味わったり、普段口にできないものを食べてみる経験をしてもらっている。
- ・おからの新しい食べ方のレシピ作成。



2 今後の課題、目標等

（やはば食ネット）

- ・調理台の数、参加者をサポートする職員の数等に限りがあり、参加者を増やすことができない。
- ・アンケートをとると大変好評である。改善の意見も取り入れながら若年層の食への理解を深めてもらうため、今後も継続していきたい。

11

地域・家庭との連携による食育の推進

「ぼくらは海の子 小袖の子 地域みんな あったか家族」

岩手県久慈市 社会福祉法人 小袖保育園

調査年月日：平成25年10月31日

1 概要

① 《概要・データ》

- ・小袖保育園は、平成25年度、園児23名、職員9名。園児は2世代、3世代家族がほとんどで子育てはお年寄りから助けられている反面、「食」に関しては「食に対する考え方の違いで悩んでいる」、「甘やかして好きなものばかり食べさせる」、「食べたいという意欲に欠ける」、「魚が豊富に獲れるのに苦手」、「よく噛めない」等の保護者の悩みも多く聞かれたことから、地域に密着した保育園だからこその食育として、ア)地域と連携した食育活動、イ)旬の野菜や魚に触れて五感(見る、聞く、触れる、嗅ぐ、食べる)を養う食育活動、ウ)家庭に向けての食育活動、を実践している。



焼き芋会と干し大根



漁船に乗せてもらう

② 《特徴的な取組》

- ・小袖集落唯一の保育園であり、地域にとって“保育園は宝”という協力体制が整っている。
- ・保育園の畑や地域の畑を借り、じゃがいもの種芋植え、さつまいも苗植え、草取り等の体験。ウニの収穫・出荷、網の手入れ等の浜仕事の見学。餅つき、ミズキ団子作り。お年寄りを招いたほのぼの給食会等の幅広い取組。園だより、給食だより・食育通信を掲示したり、回覧板に入れ187戸全世帯で見てもらう。
- ・土のついた野菜や獲れたての魚類に直接触れ五感を養う。給食時に地域で収穫した食材(季節のおくりもの)を説明。収穫した野菜(ラディッシュ、ミニトマト、枝豆等)でクッキング体験。
- ・保護者に毎日れんらく帳で食事の様子を細やかに伝える。園だより、給食だより・食育通信を活用し家庭でもよりよい食習慣を身につけられるよう保護者との連携を図る。自分たちで育てた野菜等を使った給食では、残食はなし。平成25年度の給食の目標として、箸の持ち方指導に力を入れている。給食で使用する箸を家庭にも配布したところ家庭での取り組みが広がり、効果が上がっている。

(受賞歴等)
 ・平成24年度
 北海道・東北ブロック保育研究大会「地域・家庭との連携による食育の推進部門」岩手県代表



2 今後の課題、目標等

- ・食に関する興味・関心を子どもたちだけでなく、家族全員、地域全体で持てるようにする。
- ・旬の食材に触れ食べる経験の中で食べ物に対する思いが育ち、友達や家族、地域の人たちと食事を楽しみあえるようになってきた。
- ・地域と連携した食育活動で学んだ「感謝の気持ち」を忘れてはいけないことを子どもたちに伝えていきたい。

12

テレビ、料理教室を活用した魚食の普及促進

宮城県仙台市 株式会社仙台水産

調査年月日:平成25年5月28日

1 概要

① <<概要・データ>>

- ・(株) 仙台水産は食文化提案企業を目指しており、現状の「魚離れ」を危惧し、テレビを積極的に活用した魚食普及の取組を実施。
- ・NPO法人、生協・企業等と連携し、料理教室、市場見学を開催。

② <<特徴的な取組>>

- ・魚食普及を目的に、ミヤギテレビでテレビCMを放映。(平成23年度「第42回仙台広告賞」(テレビ部門第二部)金賞を受賞)
- ・テレビ(ミヤギテレビ、NHK仙台放送局)での旬の魚情報、魚食レシピの紹介による魚食の普及。
- ・NPO法人、生協、企業等と連携し、親子、小学生、成人男性を対象に料理教室を年約20回開催。この回数は協力機関があって初めてこなせる回数。



テレビCM



仙台水産のHP

(受賞歴等)

- ・平成23年度「第42回仙台広告賞」(テレビ部門第二部)金賞受賞

2 今後の課題、目標等

- ・学校での食育活動について、料理教室などの開催も含めて積極的な取り組みを展開する方向。
- ・会社トップが魚食の普及活動に理解があることが食育活動を可能にしている。
- ・テレビを活用した魚食普及の取り組みは、人気があり当面継続し実施。
- ・魚介類の消費支出が肉類の消費支出を下回っているとする統計結果は、寿司が水産の惣菜又は魚の消費にカウントされていないことも要因の1つと考えられる。



13

つくる人と食べる人をつなぐ 食育NPO「おむすび」

宮城県仙台市 食育NPO「おむすび」

調査年月日:平成25年5月30日

1 概要

① <<概要・データ>>

- ・「食の基本は家庭から」との考えにより、4人の専業主婦が食育NPO「おむすび」を設立。「つくる人(生産者)と食べる人(消費者)をつなぐ」をコンセプトに平成20年4月から活動開始。
- ・地産地消や旬の素材にこだわった家庭料理、郷土料理、伝統食や行事食づくりを実施。
- ・食べ物が生産される過程の体験学習、食と環境保全などをテーマとして、親子の料理教室の開催や幼稚園、小学校、児童館への出前講座などにも取り組んでいる。

② <<特徴的な取組>>

- ・「お魚がきつと好きになる料理教室(親子)」をみやぎ生協、仙台水産と共催して季節ごとに開催。
- ・収穫体験や植林活動などをおして生産者の声を消費者に届ける。
- ・活動を応援してくれる会員が150名、賛助企業としてみやぎ生協、仙台水産、パールライズ宮城、農協、生産者など15団体。
- ・冊子「笑顔をつなぐ『食』の楽しさ大切さ」を作成し、幼稚園・小中高校・社会学級等へ寄贈。収益の一部と愛知県の賛助企業から送られてきたしじみを使って「お振るまいしじみ汁」1,050食で被災者支援を行った。
- ・産地視察(県内をはじめ北海道、大分県、熊本県、長崎県等)、施設見学(食肉処理場、カキ処理場等)、講演会等にも参加し活動に活かしている。
- ・情報誌「おむすび便り」を年6回発行し、「食」のネットワークづくりにつなげている。また、ブログでタイムリーな事業報告を行っている。



発行している冊子や情報誌



「おむすび」の皆さん



2 今後の課題、目標等

- ・農政局始め行政は、食育に関する活動に支援してほしい。
- ・省庁間で、もっと食育に関するつながりを持ってほしい。
- ・一人でも多くの人に「食べる楽しさ大切」を伝えていくために、幼稚園や小中学校への食育講座の回数を増やしていきたい。

14

野菜を使った食育や食生活改善活動

宮城県仙台市 コミュニティみやぎ野菜ソムリエの会

調査年月日:平成25年5月30日

1 概要

①<<概要・データ>>

- ・全国に51ある「日本ソムリエ協会」のコミュニティの1つ。
- ・野菜ソムリエの資格者を中心に会員を募り、野菜を通じた食育活動を展開。
- ・野菜ソムリエとして野菜を使った食育や食生活改善の啓発。

②<<特徴的な取組み>>

- ・株式会社明治とタイアップした野菜にチョコレートを付けて食べる「チョコベジ」活動を、野菜の摂取量を促進するために広く行っている。
- ・「チョコベジ」活動は東日本大震災被災地の仮設住宅などでも行っており、ひきこもりがちな被災者同士のコミュニケーションにも役立ち、被災者の食生活改善や支援にも繋がっている。
- ・東北で初めて開発され被災地で植えられている調理用トマト「すずこま」の普及・販路拡大（外食産業・パン屋へなど）活動の実施。
- ・仙台市食育推進協議会と連携し、食育シンポジウム等の参加。



「チョコベジ」の野菜



「チョコベジ」の様子

(受賞歴等)
・平成25年度
「野菜ソムリエアワード」
銀賞受賞

2 今後の課題、目標等

- ・会員を増やし組織を拡大したい。
- ・資金繰りに苦慮している。野菜ソムリエの資格を取得しても何をしたいかわからない資格者のために、活動の場を増やしたい。
- ・自治体と連携し、自治体が主催するイベントなどで活動できる仕事も期待している。
- ・活動の場が限られているので、野菜ソムリエとしての「仕事」にまではなかなか行き着かない。



15

あぶくま農学校「食農学習の里づくり」(農業体験事業)

宮城県角田市 公益社団法人 角田市農業振興公社

調査年月日:平成25年9月13日

1 概要

①<<概要・データ>>

- ・公社は、正会員が188名、事務局は常勤職員6名である。
- ・角田市の農業を農業者自らがデザインし、責任を持って主体的に新たな展開をするため、「あぶくま農学校」を平成12年に発足(公社が事務局となっている)。
- ・ア)食と農を結ぶ学び、イ)都市と農村を結ぶ学び、ウ)世代を結ぶ学び、エ)開かれた農業空間を生み出す学びを体現する場として、食農学習の里づくり、自立農業塾の展開、ウェブマガジンの発刊などの事業を展開。
- ・食農学習の里づくりは、上記ア、イを体験する場として、平成12年から、東京都目黒区の小学校と角田市の小学校が相互交流する活動を実施。
- ・公社発足以前の平成2年から、JAみやぎ仙南角田地区青年部が、目黒区の小学校22校に稲作指導に出向いている。この活動が契機となり、小学校同士の相互交流に発展。

②<<特徴的な取組>>

- ・目黒区の小学校(3校)と角田市の小学校(3校)の交流は、相互訪問により双方が農業体験と都市体験ができるメリットがある。
- ・農業体験では、ホームステイによる5月の田植え及び10月の稲刈り、栽培期間中の生育情報の提供により、稲の生育全般をとらえる工夫をしている。これまでに目黒区の小学校から820名の児童が参加。都市体験では、目黒区探検を実施。



農業振興公社の建物



あぶくま農学校の
シンボル「麦わら帽子」

2 今後の課題、目標等

- ・東日本大震災以降、目黒区の小学生の訪問が中断し、農業体験は市内の小中学生のみで行っており、交流は角田市からの訪問のみになっている。そのため、目黒区からの訪問再開を望んでいる。
- ・現在の農業体験は稲作中心であるため、野菜などにも広げることや、農業体験交流活動を他の学校にも広げていくことを目標としている。



16

子どもを対象とした農業体験の提供

宮城県加美郡加美町 農事組合法人KAMIX(カミックス)

調査年月日:平成25年9月27日

1 概要

① <概要・データ>

- ・カミックスは、加美町の34戸の農家で構成している農事組合法人。
- ・仙台市と加美町の小学校を中心に様々な農業体験を実施。
- ・食育活動は、農林水産省の「子ども農山漁村交流プロジェクト」及び法人の利益で資金をまかなっている。

② <特徴的な取組>

- ・仙台市の八幡小学校と加美町の鳴瀬小学校の交流の取り組みとして、平成19年から「ふれあい田んぼ教室」という体験学習を実施。その後、新たに保護者も交えた「ふれあいジャガイモ教室」という体験学習も実施(5年生対象)。
- ・以下の農業体験活動も実施。
八幡小学校の4年生と鳴瀬小学校の3～4年生による大豆の植え付けから収穫までの体験
仙台市の白百合学園小学校による、宿泊型(2泊3日)の農業体験
仙塩カトリック教会学校の小～中学生による農業体験(加美町グリーン・ツーリズム推進協議会による受け入れ)
スポーツクラブの小中学生の合宿(加美町グリーン・ツーリズム推進協議会による受け入れ)
- ・他校と合同で活動することで、知らないところで知らない人と触れ合い交流することも、子どもたちにとって良い経験になっており、農業体験を通して自然に人との関わりができる。
- ・1年生から6年生が学年を超えて一緒に行う活動が、日頃の自主的な活動にもつながっている。
- ・4年生で作った大豆、5年生で作った米を使い、みそを作るなどの一連の流れもできており、交流も生まれる。
- ・収穫感謝祭で全校で作った料理を食べており、地域の方から野菜を提供してもらうなど交流が生まれている。
- ・法人の構成員だけでなく、集落全員参加を基本とした取組になっている。

2 今後の課題、目標等

- ・栄養士を目指す大学生などにも農業体験を伴った食育が必要だと思っている。
- ・子どもが来ると活気があり、地域に元気がでる。農業体験で子どもと関わることが地域振興的な役割も果たすと良い。
- ・食育や農業体験活動は、農村地域の役目であり、果たさねばならないと考えている。



八幡小学校と鳴瀬小学校の田植えの様子



白百合学園小学校の様子



17

地域と連携した食育活動

宮城県大崎市 大崎市立中山小学校

調査年月日:平成25年9月27日

1 概要

① <概要・データ>

- ・中山小学校は職員11名、児童数9名の山間の小学校。
- ・活動内容としては、1～2年生は生活科の中で農業体験を行い、3～6年生で稲作について田植えから稲刈りまでの一連の農作業体験を行っている。田んぼはPTA顧問の協力を得て借りている。
- ・学校内の畑にジャガイモを植えて、芋ほり、調理実習などを行っている。
- ・市の福祉ボランティアの協力も得て食育活動を行っている。

② <特徴的な取組>

- ・米は古代米と、鳴子地区で推奨している品種の「ゆきむすび」を作っている。
- ・学校と地域のつながりを大切にすると同時に、地域の人の協力を得ながら食育活動をしている。収穫祭や餅つきなどの行事には、地域の人を呼んで児童と一緒に行うため喜ばれ、小学校は地域のコミュニティ的な役割も担っている。
- ・学校給食は自校給食であり、近くの農家から野菜などを仕入れて地場産品を生かした給食を提供している。給食に使う野菜などを栽培している農家で収穫体験をさせてもらい、児童が自ら収穫したのも給食に出している。
- ・単に農業体験をするだけにとどまらず、総合的学習の中で、作物や農業について子どもたち自らが調べることにしている。

2 今後の課題、目標等

- ・限られた時間の中で、農場まで移動する手段の確保が課題である。バス等の移動手段に助成があるとよい。
- ・中山小学校は、平成26年3月に閉校が決まっており、鳴子小学校と統合する予定。現在は、鳴子小学校と共同で行う活動を多くし、児童が不安を抱くことなく移行できるよう努めているところ。
- ・今後は鳴子小学校と連携して活動を進めていき、できれば今までの地域との結びつきも継続していきたい。



中山小学校校舎



学校の掲示板の様子



18

地域と連携し地場産品を活かした食育

宮城県大崎市 大崎市立鳴子小学校

調査年月日:平成25年9月27日

1 概要

① <概要・データ>

- ・平成24年に文科省食育推進事業のモデル校になってから、特に食育に力を入れて活動。
- ・地場産品を積極的に給食に取り入れる取り組みをしている。
- ・地域とのつながりを大切にしており、給食の材料は極力地場から仕入れており、加工品などもなるべく地元で加工されたものを使用している。地域の農家の集まりである「石の梅こいこいクラブ」とのつながりも深く、うめの収穫体験は同クラブの農家の梅園で行うなど、地域とのつながりを大切にしている。
- ・鳴子地区は温泉街であり、温泉旅館の調理師団体が学校に来て調理体験を教える活動も行っている。
- ・「食育だより」を発行して、家庭や地域に広く情報を発信している。

② <特徴的な取組>

- ・5年生は「ゆきむすび」を植えて稲作体験、4年生は東北大学フィールドセンターで酪農体験と乳製品の調理体験、3年生はそばを植えて花などの観察とそば打ち体験、1～2年生は「うめ」の収穫体験、梅干し作り、梅干しを使ったおにぎり作りなど、いろいろなものを関連付けながら活動。
- ・児童が収穫した野菜を給食に使用する時は、収穫時の感想などまじえて自らが収穫したものであることを校内放送でアナウンスしたり、収穫体験で収穫したブルーベリーを使った炊き込みごはんを作ったりして、食べ物に興味を持たせ、食につなげるように努めている。
- ・1年生から6年生が学年を越えて一緒に活動することにより、先生からではなく上級生から食器の並べ方など、食事のマナー等を教わることで、素直に習得できるメリットがある。



鳴子小学校校舎

7月 食育だより



「食育だより」



19

2 今後の課題、目標等

- ・学校での積極的な「食育」の取組により、学校での食事のあいさつや食事に対する感謝の気持ちなど、食事への関心が高まってきた。
- ・今後も家庭での食事のお手伝いなどを継続し、共食の大切さを意識してほしい。
- ・平成26年4月には中山小学校と統合される予定であり、新たに中山地区の生産者や地域の人たちとのつながりが加わり、これまで以上に体験活動のバリエーションが増えることが期待される。

みやぎ生活協同組合の食育活動

宮城県仙台市 みやぎ生活協同組合

調査年月日:平成25年10月23日

1 概要

① <概要・データ>

<5ADAYの取組>

- ・小学生を対象とした食事バランスガイドの説明や、1日5皿の野菜と200gの果物を食べて健康になろうという「5ADAY」活動を展開。

<組合員を対象とした産地見学・体験・交流>

- ・生産現場での産地見学、農業体験、生産者との交流を行い、農業や食育全般への理解を図る。

<バケツ稲コンテスト>

- ・実施店舗(17店舗)ごとに組合員の家族を対象に、「バケツ稲コンテスト」を実施。

② <特徴的な取組>

- ・食べ物と栄養の話聞き、献立を決めてみやぎ生協の店舗内で買い物をする「お買い物ゲーム」(「5ADAYツアー」)を行い、野菜や果物に直接触れて食に関する知識を学ぶ。
- ・県内のJAと提携し、田植えや稲刈り、田んぼの生き物調査、大豆栽培から「味噌作り」までを体験し、参加者自らが生産物を販売することなどにより、農や地域食材への理解、自然との共生、食べ物の大切さや地域文化の伝承、農産物への理解を図る。
- ・「バケツ稲コンテスト」では、参加家族に、オリジナルの栽培マニュアルや栽培日誌などの小冊子を配布し、バケツで稲を育て10月に持ち寄ってコンテストを実施。お米の栽培を体験することで、水管理の難しさなど米作りの苦労を学ぶ。



5ADAY食育体験ツアー



「わが家の味噌作り体験」
稲の種まき講習

(受賞歴等)
・平成25年度
第1回「食と農林漁業の
食育優良活動表彰」
【企業部門】
農林水産大臣賞受賞



20

2 今後の課題、目標等

- ・「5ADAY体験ツアー」は年々開催する学校が増えていて、要望にこたえるための準備が必要。
- ・バケツ稲コンテストも参加者が増えており、継続して実施していく。

食べ物、農業、健康な身体、そして自然 みんなつながっています

秋田県にかほ市 農村レストラン食育工房「農土香(のどか)」

調査年月日:平成25年6月13日

1 概要

① <概要・データ>

- ・経営者は元JAの生活指導員。(レストランと食育は夫と2人で実施)
- ・「農土香」での食事の提供を通じた食話会や店外で食育に関する講話、講習会を積極的に実施。
- ・店の冠名を「食育工房」としたのは、単なるレストランではなく利用者へ料理の作り方と豊かな食を普及する食育活動を行うためである。
- ・提供する料理は、昔ながらの料理を現代風にアレンジしたものや、一膳につき45種類以上の野菜や穀物を使うように努めている。

② <特徴的な取組>

- ・食話会や講話のテーマは、食の安全に関すること、地産地消の重要性、「お母さんの免許証」など。(「お母さんの免許証」とは、春夏秋冬それぞれの農産物とそれを人間がその時期に食材とする意味について簡潔にまとめ、母として、子どもに生命の基である食の基本を説き、同時に「旬」とは何か、農産物を作るとはどういうことか、食の「常識」を記したもの等を通じて、農村の豊かさ、農業の大切さ、「米を主食の柱に」を訴えるもの)
- ・講習会のテーマは、「家庭でできる純米粉のピザやパン、ケーキづくり」、「コメ及び野菜料理教室」など。
- ・地元の小中学校を中心に「ソバの栽培から打ち方まで」の体験教室、大豆の生態や生産量等に係る学習と豆腐作りなどを実施。(小学校のほか特別支援学校や中学校、高校でも実施)

2 今後の課題、目標等

- ・60～70歳代の人の食生活に関する知恵を活かし、具体的により多くの人へきめ細かく普及するために、高齢者のリーダーを養成していくことを目標としており、各関連機関と共にリーダー養成のための研修会などを開催できないか。



食育工房「農土香」



レストランの経営者



21

耕作放棄地を活用した農業体験施設「あきた体験農園」

秋田県秋田市 秋田県耕作放棄地対策協議会(事務局:水土里ネット秋田)

調査年月日:平成25年8月27日

1 概要

① <概要・データ>

- ・平成22年度、長年管理されていなかった秋田市仁井田地区の耕作放棄地に「あきた体験農園」を開設。会員制とし、共同で農作業を行いながら農作物(じゃがいも、大根、枝豆、白菜など)を収穫している。
- ・これら体験農園開設の目的は、耕作放棄地を再生し、農地環境の改善と都市住民の農業に対する理解を得るため、農業体験を通じた食育やコミュニティ活動による地域住民参加型の体験農園とすることとしている。また、共同作業であることから、会員相互の情報交換を行うことができる。
- ・現在は36の会員(個人や団体)登録があり、一定の年会費を徴収して運営している。なお、事務局は「水土里ネット秋田」が担っている。

② <特徴的な取組>

- ・収穫した農作物は会員が分配するほか、自ら行う収穫祭、学校や各種団体が開催するイベントなどへ提供している。
- ・また、平成24年は、秋田市内のスキー場と連携し、収穫したもち米を使い、東日本大震災により秋田県内へ避難している方たちを対象とした「餅つき大会」を実施した。

2 今後の課題、目標等

- ・年間を通じて何らかの農作業が必要であるものの、平日に作業をできる会員がほぼ限定されてしまい、共同作業による作業の平準化が課題。
- ・今後、会員数が極端に減少した場合は、運営経費が厳しくなることを想定。



収穫間近の里芋



22

地元食材を通じた食育推進と農業体験

秋田県能代市 鶴形そば製造加工株式会社

調査年月日:平成25年8月27日

1 概要

① 《概要・データ》

- ・平成16年、耕作放棄地を再生するため、鶴形地区で古くから栽培され、農家個々で食べられていた「そば」を作付けした。
- ・収穫した「そば」を加工・販売するため、地区の10人で「鶴形地区そば加工組合」を作り、現在は5人で「鶴形そば製造加工株式会社」として活動している。
- ・そばの製造、加工、販売やそば打ち体験等の活動を行っており、現在は能代市で企画した「田舎体験」の一環で、秋田市の親子がそばの播種から収穫までを体験中である。また、収穫したそばで、そば打ち、そばクレープ作りの体験を計画している。

② 《特徴的な取組》

- ・地区内の高台にあった水田(約40ha)が、揚水ポンプの故障等により耕作放棄地となっていたものを、「耕作放棄地をなくそう」と当初10haでそば作りに取り組んだ。
- ・能代市の要請で農作業体験を受け入れている。
- ・そば打ち体験は、社員が講師となり、地区内の小・中学校、老人福祉施設、公民館の講座等で実施している。地区で開催する「そば祭り」においても、そば打ち体験を行うこととしている。
- ・能代市中心市街地活性化の1つとして実施されている市の講座では、「鶴形そば道場」を毎月開催している。

2 今後の課題、目標等

- ・社員の高齢化が進み、新製品の開発を進められない状況のため、若い人に引き継ぎたいと考えている。
- ・「鶴形そば」を食べることができる場所を検討している(現在は、完全予約制や曜日限定)。



生そばとそばのむき実



23

農業体験型民宿における農作業体験

秋田県潟上市 農業体験型民宿「ファーム・イン果夢園」

調査年月日:平成25年8月28日

1 概要

① 《概要・データ》

- ・農家民宿を開始する以前から農園において収穫体験を実施していたが、平成18年7月に自宅隣に農家民宿を新築し、宿泊施設とともに農園の経営を行っている。
- ・農園総面積(2.6ヘクタール)の概ね半分に和梨を栽培、他に洋梨、りんご、野菜を栽培し、宿泊者の要望により農作業体験を実施している。なお、宿泊者以外による農作業体験も受け入れている。
- ・作業内容は収穫体験のみならず、それぞれの時期に適合した各種農作業としている。
- ・実際に農作業体験を実施した方で、リピーターとなる方も多い。

② 《特徴的な取組》

- ・「体験者に農作業をやってもらえる」という考えのもと、農作業体験の費用は無料としている。
- ・収穫した農作物は、宿泊者や農作業体験参加者の希望に応じて購入してもらうほか、地域の直売所などで販売している。

2 今後の課題、目標等

- ・現在はオーナー夫婦と母親の3名で切り盛りしており、収穫時期などは人手不足のため、宿泊の依頼をお断りすることもあり、大変心苦しく思っている。
- ・現時点においては事業拡大は考えていないが、県内のカフェとのコラボレーションにより、店内で「果夢園」で収穫した果物を使用した菓子の提供が検討されている。



玄関前に広がる果樹園



24

都市・農村交流の架け橋

秋田県大仙市 仙北平野あぐり耕房推進協議会／農家民宿 季節の郷

調査年月日:平成25年9月11日

1 概要

① <概要・データ>

- ・協議会の構成員は30戸の農家。ほかに協力農家が約10戸。
- ・平成12年から農業体験の受け入れを開始し、平成13年に農家民宿「季節の郷」を開いてからは、宿泊込みの農業体験を受け入れている。
- ・平成21年3月、当時の会員25戸で「仙北平野あぐり耕房推進協議会」を設立し、古谷氏が同協議会会長に就任。会員の年会費は1,000円。
- ・平成25年5～10月、仙台市の中学校10校約1,500人を受け入れ。
- ・仙台市からの中学生受け入れについては、学校からの依頼による。
- ・会員は、ほとんどが認定農業者で規模の大きい専業農家。会員農家は、米、アスパラガス、トマト、スイカ、トウモロコシ、しいたけ、花卉(トルコギキョウ、キク)、各種種苗、果樹などを生産。



古谷恭子会長



古谷氏の農家民宿と農業体験用水田

② <特徴的な取組>

- ・**宿泊先農家では、農業の現状やTPPに対する考え方を生徒に説明したりする取組も実施。**農業体験において秋田県産に触れもらうことで、将来の宣伝になるメリットもある。
- ・**1度に200人の農業体験を受け入れできるので、大規模校でもまとめて受け入れることができる。**宿泊の受け入れ可能数は220人程度、1戸あたり5～7人で最大10人程度。



2 今後の課題、目標等

- ・少子化もあり、将来利用が増えるのかどうか見通しが立たない。
- ・会員の高齢化が進み、会員家族の協力が必要。
- ・会員の拡大。平成24年と25年でそれぞれ2軒、計4軒を勧誘。勧誘は古谷氏と会員が実施しているが、なかなか難しい。

25

ようこそGreenWonderlandへ ～園児によるソラ豆の収穫体験～

秋田県仙北郡美郷町 農事組合法人 TEAM.Freedom

調査年月日:平成25年9月11日

1 概要

① <概要・データ>

- ・当法人は平成20年10月に設立され、15戸から各戸2名ずつの30名で構成。理事3名のうち代表理事(細井氏)は野菜担当(専業)、副代表理事は稲と大豆担当(専業)、管理担当理事は兼業で、ほとんどの構成員が兼業農家である。
- ・経営面積34.5haのうち、稲20.7ha、大豆8.5ha、ネギ1ha、そらまめ0.5ha、そば0.5haである。
- ・平成24年6月、当時の佐藤農政局長が当法人を訪問した際に、一粒莢のそらまめが畑に残っているのを見て、小学生や園児に収穫させてはどうかというアドバイスもらったのを契機に、平成25年6月に町内の幼稚園児150人を招いて、そらまめの収穫体験を実施。
- ・これまで、町内の幼稚園に収穫したそらまめを提供していたが、町教育長に収穫に來ないかと話をもちかけて実現したものである。
- ・平成25年6月の収穫体験は、出荷用の収穫残である一粒莢そらまめではなく、体験用の畝を残して実施した。



前列赤い帽子が細井氏



そらまめの収穫体験(H25.6)

② <特徴的な取組>

- ・**法人立ち上げの際、稲以外の作物栽培を検討したところ、地元では馴染みの薄いそらまめとネギに取り組みことにした。**現在は、東京都の大田市場に出荷(一部は地元給食にも出荷)している。
- ・当法人は、地下灌漑システム導入のモデルほ場になるなど、地域の代表的な農事組合法人である。

2 今後の課題、目標等

- ・平成25年、園児のそらまめの収穫体験に取り組んでみて良かったので、今後は、一般人を対象としたネギの収穫体験にも取り組みたいと考えているが、どのように取り組んだらよいか検討中で、企画、立案できる人材が必要である。
- ・作るのは得意だが、それを利用して何かやることについて工夫が必要である。



26

農業体験型民宿における農作業体験

秋田県仙北市 農家民宿 星雪館(せいせつかん)

調査年月日:平成25年9月25日

1 概要

① <<概要・データ>>

- ・平成8年頃から中学生の農業体験を受け入れ始め、平成10年に農業近代化資金を利用して農家民宿「星雪館」を始めた。
- ・現在のスタッフは、門脇さん本人と両親、農作業の指導協力者2名。
- ・ほうれんそう用ハウス800坪(20棟)をはじめ、水田50a、畑30aを所有し農作業体験を実施している。

② <<特徴的な取組>>

- ・毎年4月から10月頃まで、主に中学生の野外学習、高校生の修学旅行及び大学生による農業体験として利用されている。
- ・農業体験は、田植え、ほうれんそうの収穫、畑において栽培される各種野菜の管理及び収穫(里いも掘り等)のほか薪割りなど。
- ・特に農作業の体験メニューは設けておらず、体験者にはその時に応じた各種農作業を体験していただいているが、主にほうれんそうに係る農作業を行っている。
- ・収穫した農作物は、JAへの出荷及び直売所での販売。
- ・地域活性化を目指した仙北市農山村体験推進協議会に参加し、情報交換等を行っている。
- ・仙北市役所、わらび座、NPO法人田沢湖などが窓口となり集客に取り組んでいる。
- ・団体の体験者受入れの場合は、市内の農家民宿との連携により対応。

2 今後の課題、目標等

- ・農作業体験者の参加が多くなる期間に、農作業の指導協力者が手薄になり人材の確保等に苦慮している。
- ・将来的なこととしては、両親が高齢化により就労が困難になった際に「星雪館」の活動をどうするか。



代表 門脇 富士美氏



農業体験
(ほうれんそうの収穫)



27

食と農を通じた地域の活性化

山形県東置賜郡川西町 山形県立置賜農業高等学校

調査年月日:平成25年6月13日

1 概要

① <<概要・データ>>

- ・県立置賜農業高校は農業高校という特色を活かし、地域の課題等をテーマにプロジェクト学習に取組み、食と農を通じた地域の活性化、発展に貢献。
- ・平成24年9月に「第34回サントリー地域文化賞」を受賞。

② <<特徴的な取組>>

- ・生徒が複数のプロジェクト学習に参加し、地域の特産物を利用した商品開発、独居する高齢者への弁当宅配、共食を行い、地域の活性化等に取り組む。また、井上ひさし(同氏は川西町出身)演劇学校に参加して、演劇に開眼した元剣道部顧問の河原氏が始めた「食育ミュージカル」による食育活動を実施。

・主なプロジェクト

- 「えき・まち活性化」: NPO法人と協力し、無人化計画のあった羽前小松駅を活性化。
- 「紅大豆本舗」: 地域特産の紅大豆を使用したスイーツの商品開発、弁当宅配。
- 「食育ミュージカル」: 子どもたちに楽しみながら食を考える機会を提供。東京都町田市や山形県内等で公演、公演数は100回を超える。台本や歌詞は、井上ひさし(川西町出身)演劇学校を修了した同校職員OBが作成。
- 「MOTTAINAIプロジェクト」: ワインの絞りかすを飼料として再利用し飼育した鶏を新たな「やまがたブランド」に育てるべく販売。

- ・各プロジェクトは同校職員の熱心な指導により継続的に活動。

2 今後の課題、目標等

- ・活動資金はこれまで県や町の補助金などを使用していたが、かなり厳しい状況。
- ・教員の世代交代が進んでおり、指導者の後継者育成が課題。
- ・農業高校は県内に3校しかなく、農業高校として存続できるか不安を感じている。



置賜農業高校校舎



食育ミュージカル

(受賞歴等)
・平成24年度
「第34回サントリー地域文化賞」ほか
多数受賞



28

農業体験のできる農家レストラン

山形県長井市 農家れすとらん「なごみ庵」

調査年月日：平成25年8月26日

1 概要

① <概要・データ>

- ・「なごみ庵」は、平成19年12月に代表の自宅の農作業小屋を改装し開店。代表はかねてからグリーン・ツーリズムに興味があり、交流の場としての「農家レストランをやりたい」、「郷土の味や文化を伝えていきたい」、また、農業や食への関心が希薄になっていると感じ「子どものみならず大人にも食や農産物の生産に触れる機会が必要」との強い思いから、「レストランを始めるなら体験活動も行いたい」と考えていた。
- ・「なごみ庵」の運営は通常2人でっており、近所の人たちの協力を得て体験活動やイベントを開催している。



「なごみ庵」外観

② <特徴的な取組>

- 体験活動希望者へ農産物の収穫と料理作りをとおして、農業と食について興味を持ってもらうこととしている。具体的な活動の事例は次のとおり。
- ・ピザ作り体験は、畑からピーマンなどの野菜を収穫し、ピザのトッピングとして使用し、自店手作りの石窯で焼き上げて食べる。
- ・漬物作り体験は、畑から収穫した茄子を瓶詰めして作った漬物を、帰宅後に食べてもらえるようにしている。
- ・その他、「打ち豆作り」、「稲刈り」など要望にあわせて行う。



2 今後の課題、目標等

- ・課題は、コンスタントな集客の実現。
- ・目標は、宿泊を兼ねた体験活動の実現。

29

小学校5年生による農業体験

山形県酒田市 中平田地区農業振興協議会

調査年月日：平成25年9月13日

1 概要

① <概要・データ>

- ・協議会は、中平田地区(旧小学校の学区)の農家で構成され、中心となっている事務局担当者は、農業のほか酒田市農業委員を務める。
- ・事務局担当者が平成15年秋に、女性農業者グループ「土里夢の会」が行っていた子どもたちへの農業体験活動で、稲刈り作業に参加したことが契機となって活動を開始。
- ・平成16年に、富士見小学校1校の農業体験を受け入れ、田んぼは3aからスタート。翌年から、受け入れる小学校が徐々に増え、現在は酒田市内の5校。
- ・JA青年部や「土里夢の会」の協力をもらい、各作業は10数人のスタッフで実施している。
- ・「土里夢の会」は、酒田市が行った海外視察旅行に参加したことのある女性農業者がメンバーとなって設立されたもので、食育部会のほかに各種部会がある。



5校が農業体験を行っている田んぼ



指導する事務局担当者

② <特徴的な取組>

- ・14aの田んぼを5校に均等に区割りして農業体験の作業を行い、収穫した米も5校に均等に無償譲渡している。
- ・体験内容は、田植え、稲刈り、稲のはぎ掛け、脱穀、裁断した稲ワラを土に還元するという作業。
- ・活動に要する経費は、「JA食農教育事業」による支援を受けている。
- ・受け入れている小学校は、それぞれの校長先生から依頼を受けたものである。



2 今後の課題、目標等

- ・一部の小学校では、以前は、5・6年生が田んぼと畑の農業体験を交互に行っていたが、現在は畑は実施していない。その時の、校長先生の考えによるところが大きい。
- ・今後の目標として、親子で一緒に農業体験を行っていききたい。また、協力できる組織、団体等を募っていききたい。

30

喜多方市小学校農業科

福島県喜多方市 喜多方市教育委員会

調査年月日:平成25年6月14日

1 概要

① <<概要・データ>>

・農業の持つ教育的価値を見直し、平成18年度に国の構造改革特別区域として、喜多方市小学校農業教育特区の認定を受け、平成19年度に「喜多方市小学校農業科」を設置し、小学生を対象にした農業体験を継続的に実施している。

② <<特徴的な取組>>

- ・平成23年度からは喜多方市内全17校で農業体験を実施することとなり、現在は、総合的な学習時間(70時間)の中で農業科35時間を確保し、種まきから収穫、管理作業、調理・加工まで一連の農作業を体験。
- ・農業の持つ教育力で、3つのねらい「豊かな心」、「社会性」、「主体性」の育成を図り、人間教育の1つとしている。
- ・農業科と一般の食育の学習の違いは年間の時間数。(十分な時間数を確保することで、子どもたちが農作業との関わりが薄くなる「良いとこ取りの農業体験」にならないようにしている。)
- ・農業科テキストを副読本として作成し活用している。
- ・市が「農業科支援員」として委嘱した地域の農家が指導を行っている。(支援員は現在約90名)
- ・平成21年度より、効果検証のため小学校農業科作文コンクールを実施している。



「第9回食の架け橋賞」大賞



小学校の田んぼ

(受賞歴等)
 ・平成24年度
 第42回日本農業賞
 「第9回食の架け橋賞」
 大賞受賞



31

2 今後の課題、目標等

- ・天候や気候に左右されたり、関係者の日程調整など教師の負担が大きい。
- ・農業科支援員や予算の確保など長期的、継続的に取り組む体制の確立。
- ・学校教育での農業を国策とし、教科としての位置付けと年間の時間数確保が望まれる。(文科省と農水省等が連携し、意識の高い消費者や農を育む国民性を醸成する施策の展開)

会津若松市グリーンツーリズム・クラブ

福島県会津若松市 会津若松市農政部農政課(事務局)

調査年月日:平成25年6月14日

1 概要

① <<概要・データ>>

- ・平成22年4月に設立され、メンバーは農業・農村体験を受け入れている、または受け入れたい農家、団体(現会員数40名、年会費は一律2,000円)
- ・会員がグリーン・ツーリズムに関する学習会やPR事業、交流会を行いながら、楽しい受け入れができる体制を整備。
- ・体験メニューは、農作業体験、収穫体験、農家民宿、くらしの体験。
- ・クラブ会員の中には、ワーキングホリデーの受け入れや教育旅行の受け入れをしている方もいる。



農作業体験の様子



事務局の担当者

② <<特徴的な取組>>

- ・会津地域の伝統や暮らし、食文化を守り伝えたいという思いから、会津郷土料理(こづゆ、ニシンの山椒漬)作りや食育講座を実施している会員もいる。

2 今後の課題、目標等

- ・農作物の栽培時期等から、冬場はどうしても利用者が少ない。
- ・農家が民宿を始めたくても、書類手続きが難しいことや自宅の改修等に費用がかかることなどが開始できない要因となっている。



32

あぐりスクール

福島県白河市 白河農業協同組合(事務局:担い手支援センター)

調査年月日:平成25年8月26日

1 概要

① 《概要・データ》

- ・開始時期 : 平成21年開始。
- ・活動の構成・メンバー : 学校長(JAしらかわ代表理事専務)、JAしらかわ職員20名(担い手支援センター3名、営農経済部職員2名、就業2年以内の職員約15名)、募集人員50名
- ・目的等 : 食農教育の一環として、小学生と保護者を対象に「食」とは何かを学ばせることで未来の子どもたちの食を守り、ふるさとを大切に思う豊かな心を育てる。また、保護者が一緒に参加し、農業を共通の話題として家庭の中で話し合うことで農業に関心を持ってもらうとともに、地域農業の必要性について考えてもらう。さらに、就業2年以内の職員が担任となり、地域との交流を図り、職員としてのスキルアップを図ることも併せて目的とする。
- ・協力機関等 : 市町村教育委員会(参加者募集文書等の配布)、各支部農青連・女性部



25年度から田植えを再開



田んぼの生き物調査

② 《特徴的な取組》

- ・活動内容・現状 : 小学生とその保護者を対象に、農業体験等を実施。(田植え、野菜収穫、田んぼの生き物調査、野菜の流通・輸入学習、梨・野菜収穫、稲刈り、酒作り、野菜の料理教室等。年間8回の事業)
- ・過去の問題点と対策 : 東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う放射性物質の影響で、平成24年度までは、田植え体験等の体験学習ができなかったが、関係者の理解が得られ平成25年度から実施できた。

2 今後の課題、目標等

- ・現在の問題点と対策 : 毎年同じ参加者が多く、幅広い参加者の募集が課題。
- ・活動の将来計画 : 現在、JAしらかわ本所職員が中心となって活動しているが、今後は地域との繋がりをもさらに深め、各支所で創意工夫しながら実施するよう検討する。



33

バケツ稲学習及び田植え・稲刈り体験

福島県白河市 東西しらかわ農業協同組合(事務局:総合企画室)

調査年月日:平成25年8月26日

1 概要

① 《概要・データ》

- ・開始時期 : 平成24年開始。(管内小学校全校に案内文書送付)
- ・活動の構成・メンバー : JA東西しらかわ17名(総合企画室2名、各営農センター9名、農青連盟友6名)。管内21小学校の内9小学校の児童260名。
- ・目的等 : 食農教育の一環として、小学校5年生にバケツ稲や田植え・稲刈り等を体験してもらい、農業に対する理解を深めることを目的としている。
- ・協力機関等 : 管内各小学校・各地区農青連



JA東西しらかわ広報誌

② 《特徴的な取組》

- ・活動内容・現状 : バケツ、土、肥料、コシヒカリ・こがねもち等の苗をJAが準備し、JA農青連の盟友と営農指導員が学校に出向き指導。児童は稲の田植え・成長・収穫までの一連の過程を体験できる。また、管内の小学校に対して、家の光協会の学習教材「ちやくりん」を毎月100冊、小学校の規模に応じ無償で配布し、図書室に設置している。さらには、学校からの体験学習の要請に応じ、JAが田植え・稲刈り等について説明、指導を実施。(平成25年度は田植えについて2校実施)
- ・過去の問題点と対策 : 一部のバケツ稲が夏休み等の時期に枯れてしまうため、肥培管理(水管理)について事前学習を徹底した。
- ・バケツ稲終了後、参加児童全員が感想文を提出し、JA福島県青年大会で選ばれた感想文を表彰する。

2 今後の課題、目標等

- ・現在の問題点と対策 : 校長先生や担当教諭の異動等に伴い、活動の継続性が厳しい。平成26年度に向けて、早い時期に学校の意向等を調査したい。
- ・活動の将来計画 : 各市町村及び各学校との連絡を密にし、農作業等体験学習を中心に実施する活動としていきたい。



34

喜多方ふれあい農業田舎体験

福島県喜多方市 NPO法人 喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンター

調査年月日:平成25年9月9日

1 概要

① <概要・データ>

- 喜多方市は、「喜多方ラーメン」で知られる観光のまちであり、農家世帯が約4,200戸の農業のまちでもある。観光と農業を融合させ、農村地域の資源を活用し、都市からの交流人口を増加させることにより、農業への理解促進や農業・農村の持続的発展と地域活性化を図るために、平成11年度に行政主導によるグリーン・ツーリズム活動を開始した。平成17年4月には、喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンターを設立した。
- このセンターは、より魅力的な農業体験を提供するため、平成21年9月にNPO法人として生まれ変わり、喜多方市のグリーン・ツーリズム実践10団体の総合窓口機能と活動支援を行っている。
- 現在、農業体験だけでなく、地域の伝統や技、生きるための知恵、自然、文化を感じる体験等の幅広い体験活動を実施するため、10団体の特徴を活かしながら、喜多方市独自のグリーン・ツーリズムを推進している。
- 平成11年から24年までに、約94,000名の方が訪れ、体験交流を図っている。

② <特徴的な取組>

- 農家が普段行っている本物の農作業や農村の生活を体験してもらう滞在型の「農泊」プランに加え、複数回おこなうことができる棚田やそばのオーナー制度、また、農業体験以外にも雄国根曲り竹を使った竹細工製作体験、笹だんごやひしまき作り、綿を使った小物作り等、特色あるグリーン・ツーリズムを推進している。

2 今後の課題、目標等

- NPO法人喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンターは、以下を目標として、地域に根ざしたグリーン・ツーリズムを推進している。
 - 農業体験を通じて、情緒的に繋がった交流＝「心で交流」するグリーン・ツーリズムの推進。
 - 都市側に流されるのではなく、ありのままを追求。身の丈の範囲での体験活動の推進。
 - 交流人口の増加による効果を意図的に地場産業や地域経済へ波及させる。
 - 都市住民の本格的な就農を支援し、労働力の確保を目指す。
- この目標を達成するため、具体的には、①体験費用を廉価にすること。また、②実践団体を増やすことにより、体験コースの多様化とコースの充実を図り、参加者及びリピーターを増加させることを目指している。



茨城10団体のプランや取り組み内容を紹介する総合案内資料



35

須賀川料飲リサイクル倶楽部

福島県須賀川市 須賀川商工会議所(事務局)

調査年月日:平成25年9月30日

1 概要

① <概要・データ>

- 当倶楽部は、須賀川商工会議所会員、市内の飲食店やホテルを営む有志により平成12年に設立。
- 食品残さの堆肥化とブランド化した地場産品を消費者に提供する地産地消の循環型社会づくり(野菜クル運動)を開始し、現在、市内27店舗で活動中。
- 加盟店から出る食品残さを分別後、専用ポリバケツで会員が回収し、大玉村にある農場の堆肥化施設で、堆肥「きらきら有機グリーンコンポスト」を生産。この堆肥をJA直売所を通して生産者、市民に販売している。
- 平成22年には、市内の養護学校でこの堆肥を使って「田んぼの学校」(田植えから刈り取り、調理まで)を開催。自然とふれあい、「食」の大切さを知ることができて貴重な体験でしたと、保護者から感謝された。

② <特徴的な取組>

- 養護学校で収穫された米は、生徒たちがJA直売所で販売し、市民との交流も行うことができた。
- 堆肥をJA直売所会員の生産者にも販売し、この堆肥を投入して生産した野菜に倶楽部名入りシールを貼付し直売所で販売するとともに、加盟店へも提供。

2 今後の課題、目標等

- 会員数が伸びない状況下で倶楽部を運営していくには、堆肥販売による利益ではギリギリの状態であり、倶楽部を継続していくには不安がある。
- 学校だけでなく、一般の方(特に関東圏の方)を対象に田んぼのオーナー制度を作り、農業体験を展開していく計画がある。原発事故の影響で中断しているが、何とか実現に向け努力したい。
- 原発事故による風評被害を払拭し、野菜クル運動を通して、堆肥と野菜の販路拡大が大きな課題である。



「野菜クル運動」のポスター絵



「田んぼの学校」の農場

- (受賞歴等)
- 平成22年度「第12回米・食味分析鑑定コンクール国際大会」金賞受賞
- 平成23年度「第13回米・食味分析鑑定コンクール国際大会」特別優秀賞受賞



36